第 18 回 GO FOR WORLD CUP in さいたま 2024

2 級審判員 ： 髙橋謙介

2024 年 12 月 25 日(水)から 12 月 28 日(土)の 4 日間にかけて行われました『 第 18 回 GO FOR WORLD CUP in さいたま 2024 』の大会に、12 月 25 日(水)から 12 月 26 日(木)の 2 日間のみ関関交流事業の一環として参加させていただきました。2 日間で主審を 4 試合担当し、学びが多く貴重な経験となりました。今回は「動きとポジショニング」が全審判員共通としてのテーマでした。研修で学んだことを忘れることなく、今後の審判活動を通じて日々精進してまいります。これからは私が主審を 4 試合担当した中で気づいたこと、試合中に改善したことについて報告させていただきます。

12 月 25 日(水)　試合会場 ： さいたま市立浦和南高等学校グランド

① 12 : 15 kick off （試合時間 ：60 分　ハーフタイム ：　5 分）
対戦カード ： 履正社高等学校 － 成立学園高等学校
試合結果 ： 前半（0 － 1）　後半（1 － 1）　合計（1 － 2）
主審 ： 髙橋 謙介　　指導者 ： 柏原 丈二 氏

【気づいたこと・試合中に改善したこと】

前半の動きは対角線式審判法の動きを用いて動いていました。求められるべきポジショニングとして「主審とプレーが行われている側の副審でプレーを挟む」ことを基本として試合中の動きを大切にしていました。前半が終了した時点で、柏原氏から 2 つ指導を受けました。1 つ目は、「対角線式審判法を守ることも良いが、それ以前にもっと大切なこととして争点に対する距離が離れすぎてはいないか？このフェスティバルではもっといろんな動き方に挑戦してみても良いのではないか？」と指導されました。2 つ目は「ペナルティーエリア内でプレーが行われているときは、レフェリーもペナルティーエリアの中、もしくは最低でもペナルティーエリアの平行なライン上にいること」を指導されました。

後半の動きとしては、私の中で大切にしていた対角線式審判法の考え方から少し離れてレフェリーサイド側ばかりにいるのではなく、アシスタントレフェリーサイド側に寄ることも意識して動きました。アシスタントレフェリーサイド側へ行くことで、争点との距離も近くなり、判定する位置も前半と比べてより説得力があるポジションにいることができました。

次にペナルティーエリア内でプレーが行われている時もペナルティーエリアの中、もしくはペナルティーエリアの平行なラインに位置することを意識して動きました。前半の動きはペナルティーエリア内でプレーが行われている時にペナルティーエリアの外からプレーを監視していることが多くありました。今までの動きであると、ペナルティーエリア付近ではランニングのスピードが減速してしまっていることから約 17m~18m の距離でプレーを監視していることに気づきました。

後半はペナルティーエリア内でプレーが行われていれば、まずはペナルティーエリアの中に入っていこうというイメージを持って試合に入りました。試合中にペナルティーエリア内でプレーが行われている時、ペナルティーエリアの中に入ってプレーを約 15m の距離からプレーを監視することができました。あと 1 歩、あと 2 歩動くことで争点のプレーの監視位置も変わってくるのでプレーを監視する距離を大切にしていきたいと感じました。

② 15：45 kick off （試合時間： 60 分　ハーフタイム： 5 分）
対戦カード：さいたま市立浦和南高等学校 － 履正社高等学校
試合結果：前半（0－0）　後半（0－0）　合計（0－0）
主審：髙橋 謙介　　指導者：木村 滋 氏

【気づいたこと・試合中に改善したこと】
「ゴールキック時のポジショニング」と「意図の悪いファウルに対しての競技者へのマネジメント」の 2 つについて指導を受けました。
「ゴールキック時のポジショニング」については、普段からセンターサークルの中からでの監視をしておりますが、チームの戦術、周辺の状況を確認して修正を加えることが必要であるということを指導されました。今までの試合でもゴールキック時には常にセンターサークルの中からスタートポジションを取り、ゴールキーパーがボールをけったのちに争点に寄る動きを繰り返していました。しかし、常にセンターサークルの中でのポジションからスタートをすることで、リスクがあるということを実感しました。
今回の試合ではゴールキーパーがゴールキック時にセンターサークル付近を狙ってボールをけってくることが多くありました。その中で、レフェリーも争点に巻き込まれそうになったり、空中にあるボールがレフェリーの頭上を通ることもありました。ゴールキックの時にレフェリーとしても立ち位置を変える必要があり、タッチライン側へ最初のスタートポジションを取ることでけられたボールに対しても、慌てることなく落ち着いてその争点に対する事象を監視する事ができました。センターサークル付近にいることでレフェリーとしてもボールが近くを通れば動揺してしまって、本来見なければならない争点に遅れてしまう可能性があります。ゴールキックでプレーが始まる時は、レフェリーも落ち着いてプレーを監視できる立ち位置をフィールドで見つける必要があるということに気づけました。
次に「意図の悪いファウルに対しての競技者に対してのマネジメント」については、特に手が出ているファウルについてはいかにアンテナを張ることができるかが大切ということを指導いただきました。手が出るファウルについては、対立に発展する可能性が高いということを教えていただきました。試合中に手で相手競技者を押したり、押さえたりしている競技者に対しては温度感や雰囲気を感じ取ることが大切になります。そこで、意図の悪いファウルに対してゆっくりと寄るのではなく、素早く寄っていかなければならないと指導を受けました。
審判をしている中で、躊躇ってしまうことがあるということは素直さがフィールドで体現できていないからと考えます。素直さがあれば、体もすぐに反応して意図の悪いファウルに対しての寄るスピードも素早くなり、その場でのマネジメントの部分でも競技者を逃すことなくできると考えます。上級の審判員の方は、意図の悪いファウルに対して寄るスピードがとても早い、尚且つマネジメント能力も高いということを教えていただきました。いくら時間をかけてもいいので意図の悪いファウルをした競技者に対してしっかりとレフェリーの意見を伝えて理解してもらうまでプレーを再開させない方法も 1 つとして紹介していただきました。

2 月 26 日(木)　　試合会場 ： 堀崎公園

③ 9 : 45 kick off （試合時間 ：60 分　ハーフタイム ：5 分）
対戦カード ： 大宮アルデージャ U18 － カターレ富山 U-18
試合結果 ： 前半（1 － 2）　後半（0 － 0）　合計（1 － 2）
主審 ： 髙橋 謙介　　指導者 ： 上荒 敬司 氏

【気づいたこと・試合中に改善したこと】
　キックオフの笛を吹いたのちから、前半慌てている、おどおどしているような印象がレフェリーをしている時にありました。動きの面で、軽さがなく固い動きになっていました。中盤でのポゼッションサッカーを両チーム共に展開してくるプレースタイルでした。接触する回数も少なく、前半ファウルの笛を吹いたのは 3 回だけでした。
　「体の使い方、走ることは誰でもできるが、目を使って本当に考えられているか？」と上荒氏から指導をされた時に「体しか使えていません」と答えるしかありませんでした。「レフェリーは体よりも目のほうが疲れていなければならない」と教えていただきました。私のレフェリングを前半振り返ってみると、サイドステップ、バックステップ、たくさん首を振り周辺を見ていますが、何のためにしているのだろうか？とハーフタイム中に考えていました。ボールをフリーの状態で保持しているタイミングで「受け手の周りの動き」を見ることが大切であることを教えていただきました。後半になり、前半無駄に使っていたサイドステップやバックステップ、たくさん首を振ることは避け、落ち着いて受け手の周りの競技者を見ることに決めました。過度に動かず目の力を抜いて首を振り、考えて動いている中で接触があった時のコンタクトが綺麗に目に映りました。体よりも目を使うことで、予測がスムーズにでき、次のプレーの展開にも少し心の中で余裕を持つことができました。これからも目を使うことに重きを置き、レフェリングをできるようにします。

④ 13 : 15 kick off （試合時間 ：60 分　ハーフタイム ：5 分）
対戦カード ： カターレ富山 U-18 － 成立学園高等学校
試合結果 ： 前半（1 － 0）　後半（1 － 2）　合計（2 － 2）
主審 ： 髙橋 謙介　　指導者 ： 木村 滋 氏

【気づいたこと・試合中に改善したこと】
　前半からパスを繋ぎポゼッションサッカーを展開してくる両チームでした。ポゼッションサッカーでレフェリーが中盤にいることによって、フィールドの中央からでしか監視ができない為、タッチライン側に移動してフィールドを広く見渡して視野を取り、そこから視野を縮めて限定していく動き方を指導いただきました。実践して取り組んでみることで、私が今まで見ていた景色が一気に変わりました。今後、審判活動をしていく中で、動きの一部として取り入れてみます。
　後半開始 30 秒でカターレ富山 U-18 の 30 番に反スポーツ的行為(SPA)で警告を示した場面で、レフェリーのいた位置は 10m～15m 以内でベストなポジションが取ることができました。その事象を見るための動き出し、走るコースの選択肢が良かったので正しい判定ができました。判定する位置は 10m ~15m の範囲で出来たので、自信を持って直ぐに警告を示すことができました。1 日目から積み重ねてきた 10m ~15m の範囲内で笛を吹くことをやってきたので、それを実現できたことは私にとっても大きな成長となりました。この感覚を忘れることなく、もっと強度が上がる試合になってくると走力も必要となってくるので、しっかりとトレーニングを積み重ねていきたいと感じました。

また予期せぬ出来事が起きた時にも対応できるように、ポジショニングの距離を考えなければなりません。この試合でもありましたが、ディフェンスがボールをゴールキーパーに下げた時に足の速い FW がプレスをかけに行きゴールキーパーがボールを前に大きくけろうとしたところ FW は背中を向けて飛び、大きくクリアしようとしたボールは FW に当たり得点となりました。その時、レフェリーのいた位置はクリアするだろうと予測を立てていたので、30m ぐらい前の方にポジションを取っていました。予期せぬ出来事がいつ・どこで起きるかわからないので、中立に対応できるようなポジション取りが必要だと感じました。

【最後に】

日々サッカーは進化しているので、どんどん情報をアップデートしていきながら現代サッカーについて行きます。ペナルティーエリア内の事象の動きが現代サッカーでは求められていることを知り、もっとサッカーに対する知識や知恵、経験をしていきたいと考えています。今大会でレフェリーとして良かったところ、悪かったところはありますが、しっかりと関西に課題を持ち帰り、今後の審判活動に繋げていけるようにしていきます。

2 日間を通して、「動きとポジショニング」の面でご指導をいただいた指導者の皆様に感謝いたします。

以上